

〔書評〕

# 黄地百合子著『御伽草子と昔話』日本の継子話の深層

松本孝三

黄地百合子氏の思いのいっばい詰まった珠玉の一冊がようやく完成した。そこには彼女の全精神、その真摯な生き方のすべてが論文というかたちをとって表現されているといつていい。氏の日本文学に対する研究の視点は長年にわたる昔話のフィールドワークを通して培われてきた。それは恩師福田晃先生から学んだものであることは言うまでもない。学部時代から続く昔話調査を重ねるなかで、語り手との出会い、風土との出会い、資料の整理や報告書の作成などといった煩瑣な作業を体験することではじめて民間説話から御伽草子を照射する確たる視点を手にしたといえる。そして、それこそが本書に稀有の価値を与えているのである。昔話を単なる「資料」として扱う視点からは絶対生まれてこないだろう。次に本書の構成を掲げよう。

はじめに

日本の継子話の深層

中世における継子譚の一考察―「はな世の姫」の成立―

「姥皮」型説話と室町時代物語

姥皮型継子話の位相

継子譚に潜むもの―昔話「米埋糠埋」と「米福粟福」をめぐる―

昔話の伝承風景

「大歳の火」の伝承

昔話の一モチーフ（暗闇の中の灯）の意味するもの

―民間文芸の文芸性をめぐって―

記憶としての昔話

近江の伝説考

近江湖東の竜蛇伝説

甲賀三郎―近江甲賀地方の伝承をめぐる―

おわりに

さて、「はじめに」の中で黄地氏は昔話と御伽草子の研究の動機づけとして、「それまでの国文学の研究では、昔話（民間説話）を御伽草子に素材を提供した存在として評価してはいても、昔話そのものの豊かさを御伽草子と対等に見てゆくという

視点は希薄であった。しかし私にとつては御伽草子も昔話もちらもが、同じように面白い。だから、昔話とほとんど同じストーリーの御伽草子があるということは、その草子の生成に関わった人々も、当時語られていたであろう昔話の奇想天外で豊饒なイメージの世界に引きつけられたからだと思えた」と述べる。つまり、「面白さ」が氏にとつてのキーワードなのである。それは時代とジャンルを超えて、文学を享受する者の根底にある普遍的な「面白さ」の共有であり共感である。

まず、氏の心を揺さぶつたのは「姥皮」型のモチーフを持つ『はな世の姫』であり「鉢かづき」であり「うはかは」であったという。それらは室町期の物語草子のなかでも民間説話系に分類されるものである。話の構成は(1)主人公の出自、(2)主人公の流離・艱難、(3)神仏の加護による救済で、擬古物語系、本地物語系に対して、確かに民間説話の色彩が濃いことを具体的に論証する。中でも『はな世の姫』は民間説話的要素が物語自体の骨格を構成していることを明らかにする。その論証の仕方は実に手堅い。比較のために当時見ることのできた昔話資料はすべて見ているといつていいだろう。私家版や小部数の報告書がきわめて多かった時代に、柳田国男の『日本昔話名彙』や関敬吾の『日本昔話集成』をはるかに凌ぐ分量の報告資料を、テーマに添って逐一検討し、『はな世の姫』と昔話の近似がきわめて細部にわたること、固有名詞の希薄さ、継子いじめの淡泊さ、描写の明るさが強調されているといった指摘は、

よほど民間説話に精通していなければわからない発想である。その上で、『はな世の姫』は単に民間説話の筋立てや趣向を取り入れただけでなく、民間説話の世界をも取り入れたもの」と指摘する。氏の真骨頂は、市古貞次氏や松本隆信氏などの大先達の成果を踏襲しつつ、フィールドワークを生かすことでそれをより緻密で実証的なものにしたところにあるといえよう。

次の論攷「姥皮」型説話と室町時代物語」は、冒頭論文をさらに「姥皮」モチーフにしほつて、室町時代物語と昔話の関係に検討を加えたもの。主人公の娘が山姥から姥皮を貰い、それを被つて長者の家の釜の火焚き婆になること、長者の息子が姥皮を脱いだ娘を発見、やがて息子の嫁選びの難題を克服し、結婚に至るまでを語る構成において、素材としての「姥皮」型民間説話が、物語草子の「姫君の発見から恋愛への過程」や「嫁くらべの趣向」をつくりあげていく可能性を持つており、『はな世の姫』も「うはかは」も、現在伝承されている昔話の中にほとんど同様の筋立てのものがあることを確認した上で、それらは継子いじめの発端を持つ「姥皮」型説話が物語化したものという結論に達するのである。これも百三十例の昔話資料を検し、あるいはみずからも採訪調査に赴くという気の遠くなるような作業の結果たどり着いた確証であった。手元に確保することのきわめて難しい資料群を相手に、全体として一体どれだけの資料と格闘したのか想像の域を超えるものがある。近年、『日本昔話通観』等の資料で論文を書く人を見受けるが、氏の

この姿勢をぜひ見習ってもらいたいものだ。現代はまだ昔話調査が可能である。昔話を「古典資料」として扱うにはまだ早過ぎる。私の友人の花部英雄氏は、昔話報告書の活用には際してはできるだけ現地へ出かけ、語り手が亡くなられている場合はそのご家族あるいは近所の古老を訪ねておられた。以て手本とすべきであろう。黄地氏は、「調査には各自課題を持って参加するように」という師の教えを最も忠実に実行したのである。

さて、次の「姥皮型継子話の位相」では、「姥皮」型説話が果たして継子譚といえるのかと疑問を呈する。日本各地の昔話資料二百八例を検すると、その多くが「蛇智入」水乞型か蛙報恩型に続けて語られており、「継子いじめ」に始まるものはわずかに九・一パーセントに過ぎないという。むろん、「鉢かづき」「うはかわ」「はな世の姫」といった御伽草子と「姥皮」型モチーフとの強いつながりの中から継子譚としての位置づけがなされていることを承知の上で、それらの物語にみられる継子いじめが、実子との葛藤もなくいたって単純なのは、昔話「姥皮」の場合の単純さときわめて似ていると指摘する。そこから、「姥皮」の発端の継子いじめモチーフが室町期にすでに存在したかなり古いものであり、しかもその内容は元来きわめて簡略なものであったと見做されるという。そして、むしろその後の展開を経て長者の息子との幸福な結婚に至ることこそがこの話の中心テーマであったとする結論に至るのである。それが継子譚の形をとるのは、男子の婚姻譚に対して、女子を主人公とす

る昔話の婚姻譚が「継子の境遇―嫁となるための試練―幸福な結婚」を語ることであったからだとする。さらに、姥皮の存在は「娘が一人前の女性となり幸福な結婚をするまで、彼女の身を守る」ための変装の呪具だったという。関敬吾氏が早くに説いていた成女式の反映とみる視点を、ここでも膨大な昔話資料を綿密に検討することによって実証的に見事に解明して見せたといえよう。通過儀礼的要素については次の論攷「継子話に潜むもの―昔話「米埋糠埋」と「米福粟福」をめぐる―」においても同様の指摘がなされている。

ところで、その難題の試練の部分で「蛇智入」水乞型の語りを引用した中島すぎ嬢は、石川県の南加賀地方の優れた語り手である。昭和四十八年の夏に訪れたのが最初の出会いで、その時の語りは何と四十分に近いものであった。私の独り合点かもしれないが、この時の氏と嬢との出会いが氏の研究テーマに大きなヒントを与えたのではないかとひそかに思っている。

「大歳の火」の伝承も「昔話の一モチーフ〔暗闇の中の灯〕の意味するもの」も、一連の継子譚の考察の中から生まれてきた成果である。前者では昔話資料百八十五例の詳細な検討を通して、大歳の火は新しい年を迎えるためにむしろ積極的に消されるもので、それが嫁と姑による「家の火の管理者の世代交代」つまり「カカザ」の交替をも象徴するものであると説く。また、それが鐘師や鑄物師・鍛冶屋の伝承、さらに観音信仰とも深く関わるという見解は、「炭焼き長者」の存在と関わってたいへ

ん興味深いものがある。中で、『鉄山秘書』に記される金屋子神の降臨譚における「神と長者と巫女」の関係が、「大歳の火」の「火を与える神」と「長者の主人」と「下女」の関係に対応し、下女が実は火の神を齋き聖なる火を管理する巫女であることを昔話資料から導き出しているのはまさに慧眼である。

後者の論攷の場合も、我々は「姥皮型継子話の位相」の最後にも触れていた「山中の一軒家」が昔話において実はきわめて重要なモチーフであることに気付かされる。一軒家にたどり着くきっかけは主人公の放浪の果てに見出す（暗闇の中の灯）である。それは「姥皮」や他のいくつかの昔話とも共有の、山姥の家に至るための重要な要素であり、この小さなモチーフが昔話の構成上、挿話と挿話をつなぐ働きを有し、複合型の昔話の成立には不可欠のものであったという。納得できる見解である。確かにそこは異郷であり、山姥は人の運命を司る異界の者、姥皮を被るとは異形の者になるということなのであろう。主人公にとっては生まれ変わるための、あるいは状況を一変させるための重要な「場」の設定となる。そこから新たな次元の展開が準備される。その意味で、暗闇の彼方の灯は異郷への導入口として機能しているのであるが、氏はそれがまた語り手の生活実感にも根ざしているという。このような成果が導き出されるのも、やはり氏の精緻な資料の読み込みによるところが大である。氏の主要な論文は二十代半ばに執筆され、その後の継子物の論文には必ずといってよいほど引用されている。後続の研究

者に道筋を付けた優れた論文の証しと言つてよいであらう。

次の「記憶としての昔話」は、氏自身の幼少期の実体験に基づく昔話りの記憶をたどる。添えられた実母の昔話資料とともに、語り手論として貴重なものである。また、『近江の伝説考』にまとめられた「近江湖東の竜蛇伝説」と「甲賀三郎―近江甲賀地方の伝承をめぐって―」の二本の論攷は、氏の婚家のある琵琶湖東岸に伝承される伝説を取り上げたもの。いわば地元伝承を研究したものであるが、その根底には『日本伝説大系』第八巻「北近畿編」の地道なお仕事がある。これらも、故郷の民間説話研究をという師の徳憑に応えたものであろう。

長年高校の教育現場にあつて、真剣に生徒たちと向き合い、「自分と自分につながる人間の心や生活の深層に迫つてみたい」と考えていた（「はじめに」と語る黄地氏の真摯な心のありようが私にはよく理解できる。今日、研究との両立はより厳しい状況にある。昔話集の解説等を除けば本書に掲載されたものが黄地氏の主たる業績であらう。その間、よき先生、よき家庭人として全力で生きてきた証しがこの一冊に実を結んだのである。業績は数の問題ではない。子育てを終えた頃から毎年夏、私は自分の属する研究会に氏を誘うようになった。昔のようにまた一緒にフィールドワークをしたくなったからだ。

（三弥井書店 二〇〇五年一〇月 二四四頁）

本体価格三、八〇〇円）

（まつもと・こうぞう 堺市立工業高等学校教諭）